

『ブルーバレンタイン』の監督×マイケル・ファスベンダー×アリシア・ヴィキャンデル

あふれる涙を止められませんでした。 大切な人と観てほしい、人生に“光”をくれる物語です

全世界42カ国で200万部以上の売り上げを記録したM・L・ステッドマン氏によるベストセラー小説「海を照らす光」を、映画『ブルーバレンタイン』で高い評価を得たデレク・シアンフランス監督が映画化した『光をくれた人』。5月26日(金)からの全国公開に先駆けた直前スペシャル企画として、女優・木村佳乃さんに本作の魅力を語っていただいた。



「いい映画だったなあ」。観終えた直後、しみじみとつぶやいていました。主人公のトムとイザベルが出会い、恋に落ちて結婚する冒頭からどん引き込まれ、気づいたら涙が止まらなくなっていました。こんなに心を釘づけにされた映画は久々です。

主な登場人物にひとりも悪い人はいない。にもかかわらず、ちょっとした歯車が狂い、様々な悲劇が起こります。最初にトムとイザベルを襲った悲劇が、2度の流産。ショックで憔悴しきったイザベルが、ボートで漂流してきた赤ちゃんを自分たちの子として育てたいと思うのも無理はないかなと思いましたが、たぶんトムもそう思ったのだと思います。だから、それが過ちと分かっているながらも受け入れられます。

ところが4年後、本当の親子のように平穏に暮らしていた2人は娘の産みの母ハナと出遇ってしまいます。状況は一変、互いを思いやっていたトムとイザベルも激しい葛藤に苛まれます。



美しく切ない物語に
引き込まれました

それでもトムは日本の武士のように堪え忍び、イザベルへの愛を貫きます。一方、育てた子どもを失い、取り乱すイザベルの苦悩も分かるしハナの思いも痛烈に伝わってきます。3人それぞれ幸せとそれに伴う苦悩や悲しみが、心に深く突き刺さってきました。

演技を超えた
リアルな演技に感動

トムを演じたマイケル・ファスベンダーと、イザベルを演じたアリシア・ヴィキャンデルの演技も良かったです。以前、本作を撮ったデレク・シアンフランス監督の『ブルーバレンタイン』も観ている、男女の描かれ方が非常にリアルで印象的でした。『光をくれた人』の主役2人の演技も全とお芝居に見えないし、セリフも役のセリフには聞こえないくらいリアル。あたかも2人の人生のドキュメンタリーを観ているようでした。とくにアリシアがマイケルを見つめるまなざしがとても美しく、思わず見ほれてしまうほどです。

本作はわずかなキャストとスタッフだけで人里離れたロケ地で撮影を行ったそうです。その話を聞き、改めてデレク監督は丁寧に、繊細に本作を撮ったんだなと思いました。余談ですが、撮影中にマイケルとアリシアは本当に恋に落ちたそうですね。俳優をそこまで気持ちにさせてしまうデレク監督って本当にすごい。

そして私が最も泣かされたのは、産みの母ハナ役のレイチェル・ワイズ演技。ついトムとイザベル夫婦の悲しみに目が行きがちですが、実はハナ自身も、夫と娘をほぼ同時に失うという、つらい体験をしているわけです。そんな中、奇跡的に娘は生きていて自分の元へ戻ってきたものの、全然なつかない。私も同じ母親とし

「登場する2人の母親の幸せと痛みが伝わり、心が釘づけにされました」



て、息苦しくなるほどつらいシーンでした。何よりあの葛藤を演じるのはかなり難しかったはず。でも、レイチェルは見事に表現されていました。さすがですね。

また、この映画は何より雄大な景色がいいんです。孤島にボツンとたたずむ灯台と、その周囲を取り囲む海。よくこのロケ地を見つけたと思うほどで、登場人物たちの心情とも相まっていました。とにかく美しいシーンだらけで、一瞬も見逃せません。キャストもロケ地も含め、デレク監督がすべてにおいて一切妥協しなかったことが、スクリーンからひしひしと伝わってきます。

ラストは不思議なほど
安らかな気持ちに

『光をくれた人』という邦題が意味するとおり、トムやイザベル、ハナだけでなく、ハナの両親、イザベルの父など、登場人物の全員が「大切な人を守る」という愛を貫き、誰かの人生に「光」を与えています。

私にとって「光をくれた人」は両親。結婚して、子どもができて母親になって初めて、いかに自分が両親に守られてきたかが分かるようになりました。いくつになっても親にとって私は子どもなので守ってくれると思うのですが、私もまた親を大切に守っていきたく

STORY

心を閉ざし孤独を求め、オーストラリアの孤島で灯台守になったトム。しかし、美しく快活なイザベルが彼に再び生きる力を与えてくれた。彼らは夫婦となり、孤島で幸福に暮らす。度重なる流産がイザベルの心を傷つける。そんなある日、島にボートが流れ着く。乗っていたのは見知らぬ男の死体と女の子の赤ん坊。赤ん坊を娘として育てたいと願うイザベル。それが過ちと知りつつ願いを受け入れるトム。4年後、愛らしく育った娘と幸せの絶頂にいた2人は、偶然にも娘の産みの母ハナと出遇ってしまう――。

と強く思うようになりました。本作はそんな人を思う気持ち、愛する気持ちの美しさを伝えてくれます。私たちにも希望の「光」を与え、観終えた後、不思議なほど安らかな気持ちにしてくれるんです。老若男女誰もが楽しめる映画ですが、ぜひ恋人同士、あるいはこれから大切な関係を築きたいと思う人と一緒に観てほしいです。私ももう一度、映画館に足を運び、心ゆくまで涙腺を崩壊させながら、『光をくれた人』の世界に心酔したいなと思っています。(談)

5月19日(金)朝日新聞に掲載されました。
(関東地区夕刊のみ。一部地域を除きます)



女優
木村 佳乃さん

きむらよしの / 1976年生まれ。幼少期をロンドンとニューヨークで過ごす。96年にドラマで女優デビュー。以降、数々のドラマ、映画などに出演。2010年に結婚。11年に長女、13年に次女を出産。現在、NHK朝の連続テレビ小説「ひよっこ」にヒロインの母親役で出演中。